

## 低学年の道徳授業

### 「おりがみめいじん」

#### 1. 資料について

本資料は、『ゆたかな心』2年生版に収録されている、主に「勤勉・努力」という内容項目を学習するために書かれた資料である。

#### 2. 本時のポイント

本時の授業展開は、次の5つの観点を意識して行った。というより、実は本時の授業を行ったあと、先生方に本時の授業を分析していただいた結果、このような「型」に行きついたというのが本当のところである。

- ①ぜひとも考えたいと思う問いをもつ
- ②問い合わせて、自分なりの予想を立てる
- ③みんなが立てた予想を分類する
- ④予想を、資料を読んで確かめる  
子どもの反応を適切な言葉を使って意味づける
- I みんなが立てた予想を具体的に確認し合う
- II 予想以外の新しい考え方を見つける
- III 教師の考えも、必要に応じて子どもに問いかける
- ⑤新しい考え方を自分の目標に照らし合わせて確認し合う

#### 3. 授業の実際

- (1) 資料名 「おりがみめいじん」  
『ゆたかな心』光文書院
  - (2) 内容項目 1-(2) 勤勉・努力
  - (3) 本時の展開  
(『』は教師 「 」は子ども)
- ①ぜひとも考えたいと思う問い合わせをもつ  
『今、一生懸命がんばっていることはなんですか』  
「なわとび」「ピアノ」  
『もっと上手になりたいと思いませんか』  
「思う」



加藤 宣行

『今日の勉強をすれば、きっと上手に、名人になることができると思います。名人になるためのひみつをゲットしましょう』

②問い合わせて、自分なりの予想を立てる  
『何かの名人になるために必要なことってなんでしょう』

『いっぱい練習すること』

『コツコツと努力する』

『好きになる』

『あきらめない』

『名人を目指してがんばる』

③みんなが立てた予想を分類する

『『いっぱい練習』と『コツコツ努力』は同じ仲間ですね。これをAとしましょう』

『『好きになる』はまたちょっと違うね。Bとしましょう』

『『あきらめない』これも大切ですね。Cとしましょう』

『『名人を目指して』なるほどこれもいいですね。Dとしましょう』

『他にはないかな。今日の勉強をすれば、Eを見つけられるかもしれないよ。ではお話を読みます』

④予想を、資料を読んで確かめる

『みんなが考えたA～Dは、この話の中にあったかな』

『あった、Aはたくさんあった』

『Cは最初からあったんじゃないかな』

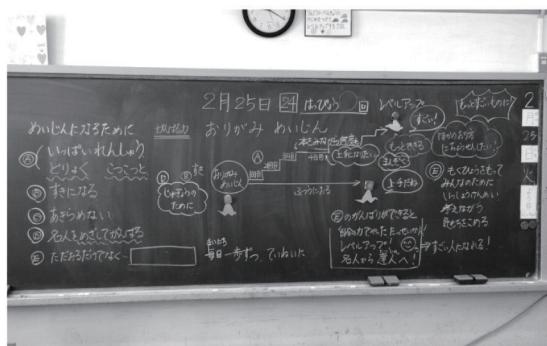
『なるほど、この子は最初からおりがみが上手で、好きだったというわけだ。ということは、普通に折ってもOKだった。(ここで普通に折った鶴の折り紙を提示し、黒板に貼る。) だけど、飛ぶようにできないかなと、上を目指して折った。これがDですね。(ここで、飛ぶ鶴の折り紙を提示し、実際に動かしてみせる)』

「すごい!」(いっせいに子どもたちから歓声が上がる)

#### ☆板書の工夫

ここで、写真のように普通に折った鶴と工夫をして折った飛ぶ鶴を対比的に提示し、その違いが視覚的に一目瞭然となるようにする。

このことにより、子どもたちは名人の上があることに気づき、より高みを目指して努力することの意味を考え始めるようになる。



⑤新しい考え方を自分の目標に照らし合わせて確認し合う

『すごいね! このすごいに行くためには、みんなが見つけたABCDの4つプラス、Eのがんばりがありそうだよ』

『ただ折るのではなく、ていねいに折る』

『でもさ、失敗したり、これでいいのかなあって悩みながら進んでいるから、真っ直ぐな線ではないんじゃないかな』

『なるほど。じゃあ、階段にしようか。階段を上っていくけれど、たまに足踏みすることもあるよね。それは無駄な時間なのかな』

『そういう時間も必要だと思う』

#### ☆子どもの発言の真意を汲み取る

このようなやりとりは、ちょっと油断すると聞き流してしまうような、通りのよい発言であるが、よく考えると大変深い。努力というのは、やみくもに突っ走ることではなく、目的意識をもち、一つ一つの意味をよく考え、振り返りつつ、着実に進むということである。そのような過程で起こる失敗は、次につながるよい失敗となるであろう。

『なるほどなあ、そうすると、「これでいいのかなあ」って悩むことは悪いことではないのですね』

『うん、いいことだね』

さて、ここまで授業を追ってきて、⑥があることに気づいた。

それが次のようなものである。

⑥自分たちが学んだことを実生活にあてはめて考え、これからの生活に希望をもつ。(よりよい価値観への変容を実感する。)

『そのようなEのがんばりがありそうですね。』

『目標をもって、みんなのために一生懸命、考えながら気持ちを込める』

『そのような、【いい努力】をすると、どんないいことが待っているでしょう』

『自分の力でやったという達成感がある』

『すごい人になれる』

『レベルアップできる』

『名人から達人へ!』

#### 4. 授業後の考察

「がんばればできるようになる」などというような、誰でもわかっているつもりのことを改めて考え直す。少々大げさに言えば、がんばることの意味を、自分たちで予想を立て、それを検証していくようになるのである。そうすることによって、子どもたちは「ああ、そういうことか」と、自分の中で納得しながら、主体的に価値を自覚し獲得するようになる。

このように、道徳の時間は、授業の中で外からの押しつけではなく、内面からみなぎってくるような高揚感を味わわせることができたらいいと思う。子どもたちは自らよりよい方向を見出していく主体となるであろう。

実際、本時でもそのような動きがたくさん見られた。語呂合わせの洒落のようだが、「『Eの努力(いい努力)』をしたら、どんないいことが起きるだろう」というような、自分たちが見つけた努力の秘密を明らかにし、それを用いて努力を続けると、どんなに明るい未来が待っているかを、希望をもって語っている。

「すごい人になれる」「名人から達人へ!」などという言葉に実感がこもり、重みが増す。借り物の言わされた言葉ではなく、子どもたち自らが選択し、納得した言葉になるのである。ここにおいて、子どもたちの言葉は力をもち、美辞麗句ではなくなるのである。